# 特別養護老人ホームおもと園

**事業所データ**

- 法人名 社会福祉法人 おもと会
- サービス種別 介護老人福祉施設
- 利用定員 80名
- 所在地 那覇市天久1000番地
- 従業員数 68名（常勤39名/非常勤29名）

## ノーリフティングケアの推進で入居者と職員を守る

### ■「腰痛が多い」という現場の声から始まった

始まりは、職員アンケートにおいて、約半数の職員が「腰痛」を訴えるという結果でした。経営側としても、今後、入居者の高齢化・重度化が進み、移乗介護の負担が増える中で、「何とかしなくては」という問題意識があり、2017年に策定した中期計画において「ノーリフティングケアの推進」を位置付けました。

### ■機器導入と並行して研修、委員会の設置、OJTを実施

2019年から、スライディングボードやリフト等の段階的な導入と並行して、現場のリーダー格となる職員が研修を受講しました。また、ノーリフト委員会を設置し、月1回、現場での機器の利用状況や課題の共有、入居者の状態の変化に応じた機器の利用方法の決定を行っています。そのほか、月2回、法人内の専門職による技術指導を受ける仕組みを設けています。

### ■機器の定着のため、目的を繰り返し伝える、環境を整える

**ポイント** 目的の繰り返しの共有による機器導入の定着

導入当初は、機器の台数が限られていたこともあり、一部の職員から「機器を使わない方が早い」という声がありました。

施設長自ら、目的は「入居者の安全とケアの質の向上」であることを繰り返し伝えました。そのほかにも、積極的に現場を回り、声掛けを行い、ときには職員を褒めることで、機器の定着を図りました。

**ポイント** イラストによる機器利用の可視化

利用者ごとに機器の利用有無を、個々の職員が常に把握することは難しい状況がありました。

ユニットの入口にイラストを掲示しています。「この入居者にはこの機器を利用する」と一目で分かるように表示することで、現場の職員が迷わずに機器を利用できる環境を整えています。

### ■外傷インシデントが減少、新卒採用者も増加

当初は、腰痛を訴える職員の減少を目標としていましたが、職員の年齢や個々の身体状況といった要因もあり、明確な変化は確認できませんでした。一方で、入居者の外傷や皮膚剥離事故に関するインシデント件数は、取組前と比べて半減しました。

また、法人全体として、テクノロジーの導入に積極的に取り組み、発信することで、新卒の採用者数も増えており、中途採用においても「HPで取組を見て」という応募があります。

| | 2017～2019年 | 2020～2024年 |
|---|---|---|
| 外傷インシデント件数（平均） | 53 件/年 | 25.2 件/年 |
| 新卒採用者数（平均） | 0.6 人/年 | 3 人/年 |

呉屋　徹さん
（施設長）

**メッセージ** 「ソフト面の取組こそ重要」

機器を購入しただけでは、自然に定着することはありません。実際、当施設でも過去にリフトを導入したことがありましたが、倉庫で使われないままになっていた時期がありました。機器を活用していくためには、導入目的の共有、リーダーの育成、現場職員へのOJTなど、ソフト面の取組こそが重要だと考えています。また、そのためには、管理職による日々の声掛けや、経営状況も含めた情報発信、現場職員の意見を丁寧に聞くといった、双方向のコミュニケーションが欠かせないと考えます。